

鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

第四回

第四章 司法官の道

1

貞剛ていこうは、焦りにも似た気持ちを抱いだいて過すごしていた。

死ぬ気で京に上った。しかし主だった戦闘は終わっていた。四天してん

流りゅうめんきよかいでん免許皆伝の腕を見せる機会には恵めぐまれなかった。

たとえ恵めぐまれたとしても、世の中は剣術よりも砲術に重きを置くようになっている。時代遅れと言われても仕方がない。

剣術同様に貞剛自身も時代に遅れてしまうのではないかと不安になる。

若さゆえの不安だと言えはそれまでだが、品川弥二郎のように最前線で戦いたいという思いは日々強くなる一方だ。

叔父の宰平は、住友に來ないかと誘ってくれた。有難いことだ。

しかし貞剛は、「官の道」で国に尽くしたいと謝絶した。

師である西川吉輔からは国家について学んだ。それまで貞剛には国家という意識はなかった。国と言えは近江国だった。

今は違う。日本という国家だ。そして日本としてまとまらねば、アメリカやイギリスに支配されてしまうと危機感を抱いている。

元々、貞剛の身体には佐々木宮の宮司という神道、神に仕える血が流れている。その血が国家という色に染まっているのだ。

日本は、まだ十分に統一されていない。

幕臣榎本武揚や新撰組土方歳三は、蝦夷地に渡り、新政府とまだ

まだ戦い続ける気だ。大勢は決したと思われのだが、それでも予断は許さない。

こんな不安定な状況でも自分は必要とされていないのか。なんのために今まで辛い修行をしてきたのだ。どうして吉輔は、自分を再度、京に呼び戻してくれないのか。

「しかし……」と貞剛は悩む。

自分が再び京に行ってしまうえば、伊庭家はどうなるのだ。

父貞隆は伯太藩から帰ってきたが、自分は長男として伊庭家を守

らねばならない責任がある。

貞剛は、庭で竹刀しなを思い切り振り下ろす。汗が飛び散る。その瞬間だけ、気鬱きうつの雲が晴れる気がする。

「貞剛、貞剛、こちらに来なさい」

貞隆が呼んでいる。

「はい、お父上、お呼びでしょうか」

貞剛は、汗を拭きながら貞隆の前に立った。

「精がでるなあ」

貞隆は、力なく言った。

「免許皆伝となりましたが、修行を怠おこたりますと、腕が錆さびてしましますから」

貞剛は答えた。

「お前、京に行きたいのだろうか？」

じろつと睨にらむ。

貞剛は、どのように答えようかと悩んだ。

行きたいと答えれば、貞隆が引き留めるだろう。非常にやっかいなことになる。

反対に行きたくないと言え、自分の心に嘘をつくことになる。

「私は、分かっている。お前は、このごろイライラしているからな。

京に行きなさい。もはや新しい時代になった。自分を試しなさい。

新しい時代に飛び込んでみなさい」

貞隆は穏やかに言った。

貞剛は、信じられないという顔で貞隆を見つめた。

「父上、本当によろしいのですか」

貞剛は土の上にひざまず 跪き、貞隆を見上げた。

「よいも悪いも、こうなることは定まっていたと考えるしかあるまい」

貞隆は寂しく笑った。

「新政府は安定しておりません。私は、命を落とすかもしれません」

貞剛は、貞隆を見つめる。

「孔子は『死生命あり』と言っている。人の生き死には、天の命ずるところだ。お前は、お前の務めを果たせばよい」

貞隆はきっぱりと言う。

「父上は、どうされるおつもりですか」

泉州から戻ってきて以来、氣力が萎なえたような様子で庭を眺めていることが多い。

「私か……」貞隆はつよ 呟くように言い、「心配するな。私には私の務めがあるだろう。いずれ見つかる」と薄く笑った。

「国をまとめるために版籍を天皇に奉還せよとの動きもあるやに聞いております。そうなると伯太藩は無くなります」

新政府にとっては、いつまでも旧幕府時代の藩が残っているのは国家統一ができない。

そのため藩主に版籍奉還させようと考えていた。その動きは貞剛の耳にも入ってきている。

「藩が無くなれば、代官職を辞するまでじゃ。そうなれば私も自由にさせてもらう。殿に仕えることもない。その後は、お前のように新しい時代に踏み出す若者を一人でも多く育てようかのお」

貞隆は優しく微笑んだ。

「父上、必ずや、伊庭家の名を高らしめ、孝行を尽くします」

貞剛は深く低頭した。

『『死生命あり』に続けて『富貴天ふうきにあり』というではないか。あまり気張るでない。天の命ずるままに進みなさい』

貞隆の思いやりに貞剛は感激の涙を必死でこらえた。

論語は、「死生命あり、富貴天にあり。君子敬して失ふことなく、人と恭うやまつしくして礼あらば、四海の内、皆兄弟なり」と言う。

貞隆は、貞剛に新時代における生き方を教えているのだ。

「なあ、貞剛よ」

「はい、父上」

「親に孝を尽くすというのは、何も金銭的に報いることではない。息子のお前が、元気に活躍し、お国のお役に立っているということ

を風の便りにでも聞くのが一番の孝行というものだ。私たちのことは気にするでない。思う存分、生きたらよい」

徳川幕府が倒れ、明治という新しい時代が生まれようとしている。

しかし、それは血で血を洗う戦いが繰り広げられた結果だ。

果たして、新しい時代は希望に満ちているだろうか。

そうではないかもしれない。なぜなら騙し、裏切り、殺し合った
事実は消えない。

新しい時代は、強い憎しみ、恨みなど、今まで経験したことがない負の人間性がおどろおどろしい姿となって登場し、人々に絶望を与えるかもしれない。

もし絶望の時代になったとして、私はどのように生きるべきなのか。どのような時代でも天という大きな存在に対して敬虔けいけんな気持ちと姿勢を忘れないようにしなければならない。

それが孝行を尽くすことだと貞隆なりの教訓を込めた言葉だ。

貞隆の許しを得た貞剛は、ただちに吉輔に手紙を書き、上洛の許しを乞うた。

吉輔からは、書状が届いた。

「君の上洛を待っている」

貞剛は再び、京に向かった。

次に故郷に帰って来るのは何年も先になるかもしれない。寂しく

切ない気持ちがある。

しかし、それ以上に未来への大きな希望で満たされつつあった。

2

新政府は、徳川幕府に対抗する政治体制として、天皇を中心とする古代律令制りつりょうに範を取った制度を定めた。

政府内に太政官たじょうかんを置き、行政や司法を司り、天皇を補佐するといふものだ。

併せて首都機能を徐々に東京に移し始めたのである。

京都には、旧勢力がまだまだ蠢うごめいている。大久保利通など新政府の中心人物たちが自由に力を発揮するためには、京都を離れることが必要だったのだ。

新しい酒は新しい革袋に盛れということだろう。

天皇も京都御所から旧江戸城である皇居へと居を移した。

しかし、東京遷都が正式に決められたわけではない。そのため京都には天皇の名代としての御留守官が設置されていた。

古来、天皇が京都を不在にする間、御留守官を設置することが決められていたからである。

「君には刑法官になってもらいたい」

上洛して間もなく貞剛は吉輔に呼び出され、仕官先を告げられた。

「刑法官ですか」

貞剛は、どのような職務か思い当たらなかった。

刑法官とは、京都御留守官の下で監察、きくごく鞠獄、ほぼう捕亡の役割を担った。

監察とは査察や取り締まり、鞠獄とは罪人の取り調べ、捕亡とは罪人の捕縛である。

「君も知っているように新政府に反対する者や不満分子も多い。治安はまだ十分とはいいたい。そこで君のように剣術にも優れ、かつ自らを律することができる人物に治安維持の役割を担って欲しいのだ」

この刑法官という役割は、現在で言えば、検察官が最も近いと思われる。

吉輔は続ける。

「ところで以前、君に、世の中はいずれ法で治められるようになると言ったのを覚えておられるか」

「はい。覚えております」

「徳川の時代にも法はあった。しかしそれは武士を最上位に置いた恣意的な法だ。しゐ新しい時代には相応しくない。ふさわ西洋では法の下では誰もが平等で、公平な裁きを受けることができる。武士も農民も金

持ちも貧民もないのだ」吉輔は一息入れると、貞剛を見つめて「天皇が天に誓われた五箇条のご誓文を覚えていらっしゃるだろう」と聞いた。

「はい。私は感激し、生きる指針にしようと考えております」

貞剛は、思いを正直に話した。

吉輔は微笑んだ。

「あの精神を現実のものにするには法の支配が必要なだよ。これを導き、監視するのが刑法官の役割だと思いなさい。かの老子は『法、ますますあきらかにして、盗賊多くあり』と申されたが、盗賊を増やすのが目的ではない。新しい時代には、天の下に誰もが等しく平穩に暮らすことができることを、法を以て示すのが刑法官の務めだ。これは命懸けになるぞ。誰もがそのように望んでいるわけではないからな」

吉輔は、厳粛な面持ちで言った。

すでに貞剛は、師である吉輔から命じられればどのような官職であろうと受ける覚悟でいた。たとえそれが些末な官職であろうとも厭うつもりはなかった。だから刑法官と他の官職を比べようと思う気持ちは毫もない。

また自分が刑法官に向いているのかどうかは、やってみないと分からないではないか。

吉輔は、心の父と恃む人物だ。貞剛の資質を一番知ってくれてい

るといふ信頼がある。その吉輔が、刑法官になれといふのであれば、迷ふことなく、それになるしかない。

京都御所などの警備の任務は不完全燃焼に終わった。新しい国造りに貢献したいといふ真摯な熱情を満足させてくれるものではなかった。

——法の下に、全ての人が等しく平穩に暮らすことができるようにするのが務め……。

命懸けの職務だと吉輔は言う。望むところだ。どれだけ自分が国家のために役に立つのか、やってみようではないか。

貞剛は、ようやく自分の居場所が定まるのではないかという予感を感じていた。

一八六九年（明治二年）三月初め、貞剛は刑法官に任官し、少監察に命じられた。貞剛、二十三歳であった。

3

一八六九年六月二十七日、蝦夷地の箱館五稜郭はこだてごりょうかくで新政府に抵抗していた榎本武揚以下旧幕府軍が降伏した。

戊辰戦争ぼしんがついに終結したのである。

その勢いを借り、新政府は七月二十五日に版籍奉還の聴許ちやうきよにこぎ

つけた。

国政は府、藩、県の三治一致体制となり、各諸侯から領地の領有権を没収し、彼らを知藩事に任命した。

さらに同年八月十五日には政府組織の改革を断行した。

政府に太政官と神祇官じんぎの二官を置き、太政官の下に民部省、大蔵省、兵部省ひょうぶ、刑部省、宮内省くわい、外務省、集議院、大学校、弾正台を置いた。

貞剛は、新組織において弾正台の巡察属に任命された。

弾正台は、刑法官を廃止し、設置された組織で、やはり今で言う検察庁である。

本台を東京、支部を京都に置いた。

弾正台の任務は、刑法官と同様に国内の風紀肃清しゆくせいや民間、政府などの不正の摘発、弾劾だんがいである。

制度上は、不正を摘発、弾劾する際は、太政官を経ないで直接、天皇に奏上するという強い権限を持っている独立機関だが、実際は、裁判権を刑部省が握っており、どれほど独立した権限を持ちえているかは疑問だった。

職位は、尹いん、大弼だいひつ、少弼せうひつ、大忠だいちゆう、少忠せうちゆう、大疏だいそ、少疏せうそ、台掌たいしよう、巡察しゆくせいとなっていた。

貞剛はまだ若く、一番下位の職位に任命されたのである。

新制度の下で、正式な官位に就いたことを報告がてら帰郷し、賞与として受け取った五十金もの大金を母田鶴たづに渡した。

五十金とはどの程度の金額なのだろうか。五十両と考えると、当時の一両が現在の十万円となるから、今なら五百万円にもなる。

その頃、伊庭家は版籍奉還で藩が無くなり、貞隆が代官としての職を失ったため、かなり窮迫きゆうぱくしていた。

そのため田鶴は、貞剛が持参した五十金を大変に喜んだ。

親孝行に勝る喜びはないと思う貞剛は、田鶴の笑顔を見て、嬉しくてたまらず、一生懸命、職務に励むことを誓ったのである。

国内は、まだまだ落ち着いた状況とは言えなかった。

誰もが政府に従順というわけではない。

政府は、次々に施策を繰り出し、制度を変えて中央集権体制を整えようと躍起やつきになっている。

しかし、経済的には、凶作が続き、各地で農民一揆が頻発している。また租税面においても百万石の歳入不足が見込まれる事態おちいに陥っている。相当、巨額な歳入不足である。

政府では徴税を強化しようとする大蔵省と、実際に徴税に当たる地方官僚との対立が深刻化していた。

地方官僚にすれば庶民の苦境を看過できなかったのだろう。

新しい時代になったのに少しも生活が楽にならないではないか。

こうした不満は、庶民ばかりでなく版籍奉還で失業した多くの士族たちの間にも渦巻いていた。

彼らは尊王攘夷そのうじょういの志士として新しい国造りに命を懸けて戦った。

それにもかかわらず美酒に酔っているのは薩長や、それにつながる一部の政府高官に過ぎない。大半は、旧幕府時代よりも貧しさに苦しんでいたのである。政府は、攘夷の思想をさっさと捨て去り、西洋化への道をまっしぐらに突き進んでいる。

こんなはずではなかった。そう思うのは当然のことだ。

彼らは、政府が進める政策に対する反発を強めていた。

実は、貞剛が勤務する弾正台には、攘夷派の士族が多いためである。

彼らは、貞剛と同様に純粋な憂国の士だった。徳川幕府を倒し、新しい国を造ろうと行動した。

ところが純粋すぎる攘夷派の存在は、欧米列強と交流しそれらに学び、それらと対抗する国家造りを目指す政府にとっては目障りな存在となっていた。政府は、こうした攘夷派士族を弾正台に集めた傾向があった。

「くそ、面白くない」

「偉くなるのは薩長ばかりじゃないか」

「いやいや、薩長といっても西洋かぶれの連中ばかりだ。俺なんぞ

は捨て置かれたままだ」

「弾正台の俺たちに不正を取り締まれといっても薩長の連中を弾劾しようとしたら、途中でうやむやにされてしまう。やってられないぞ」

貞剛は、仲間の不平不満を頻繁に耳にした。

しかし貞剛は、そうした不平不満に同調することはなく、法に則^{のつと}った処置を心掛けるべく真面目に職務に精励していた。

一八六九年（明治二年）二月十五日、熊本肥後藩出身の参与横井小楠^{しょうなん}が政府に不満を持つ十津川藩士^{とつがわ}らに暗殺されるという事件が発生した。

横井は、旧幕府内でも開国派とみられ、攘夷派から恨みを買っていたのである。

新政府から参与として迎えられた横井は、欧米列強と対抗するための近代化、西洋化政策の立案に協力していた。

「横井など、殺されて当然だ。あいつはこの国を外国に売り渡そうとするような変節漢だ」

弾正台の一部からは死刑となった暗殺犯、十津川藩士らに同情する声が上がっていた。

続いて同年十月八日、長州藩出身の大村益次郎^{ますしろう}（村田蔵六^{むらたぞうろく}）が同じ長州藩士神代直人^{こうじろなおと}ら八人の刺客に襲撃され、重傷を負ったのであ

る。

大村はその際の傷が元で同年十二月七日に死亡。享年四十六だった。

大村は、維新十傑に数えられる政府の大物。

進んだ西洋の科学技術を採用入れるべきだと早くから考え、井上勝まさのぶや伊藤博文ひらふみら長州藩の五人の若者のイギリスへの密航を密かに支援したほどだ。彼らは長州ファイブと呼ばれ、国造りに大きな貢献を果たした。

大村は、医師であるにもかかわらず軍事に天才的才能を發揮し、戊辰戦争ぼしんにおいて官軍勝利の立役者でもあった。

そこで政府は大村を兵部大輔たいふ、現在でいう次官に任命し、主として軍事制度改革を担わせた。

大村は、実質的な軍事制度改革の責任者として、軍隊の西洋化や国民皆兵などの改革を進めようとしていた。

しかし、その改革はあまりにも急進的で薩摩藩の大久保利通ちゆうでさえ躊躇ちゆうちゆうし、もう少し漸進ぜんしん的に進めるべきではないかと諭さとすほどだった。

当然、大村の改革をこころよく思わない攘夷派からは恨まれることになる。

中でも、弾正台京都支部長官である弾正台大忠、薩摩藩士海江田かいえだ

信義のぶよしは大村を殺してやりたいと広言するほどだった。

海江田は戊辰戦争や上野戦争で、大村と作戦を巡ってことごとく対立してきたからであった。

「大村が襲われたぞ！」

貞剛が勤務する弾正台京都支部に激震が走った。

大村は、長州へ帰省の途上、京都に立ち寄り、木屋町の旅館きやまぢに滞在中、刺客に襲われた。

弾正台と刑部省は直ちに捜索にあたり、刺客八人のうち二人を取り逃がしたが、六人を逮捕した。

「刺客の中心人物は、長州藩ではないか。同じ長州藩同士が、かくもいがみ合うとは……」

刺客逮捕に当たった貞剛は事態の深刻さを嘆いた。

政府は驚愕きょうがくした。横井に続いて大村までもが攘夷派に襲われたのだ。この事態を看過することはできない。

早く手を打たねば、次々に政府高官が襲われる可能性がある。明日は我が身おののと慄おそいた。

見せしめに死刑に処すべし。刑部省は、京都出張所にただちに処刑するように命じたのである。

裁判権は刑部省にあるが、重大犯罪は、弾正台ざんみが吟味し、奏上し、天皇の勅裁ちよくさいを仰あおぐことになっていた。刑部省は弾正台を無視して刺

客たちの処分を決定したのである。

なぜ刑部省は、弾正台を無視したのか。

刑部省は、大村襲撃が弾正台大忠である海江田の陰謀ではないかと疑っていたからである。

海江田が大村を憎んでいることは広く知られていた。その上、刺客の一人である神代と交流を持っていることも把握していた。

またかねてより弾正台の一部には政府に批判的な攘夷派がいることも承知していた。

このような状況を鑑みて、「弾正台を関与させず処刑を急げ」というのが刑部省の判断となった。

一方、貞剛たち弾正台京都支部は、刺客の死刑回避で意見統一していた。

それには大村を憎む海江田の考えが反映されていたことは間違いないが、刺客に同情する声が強かったのだ。

——大村は国賊である。

弾正台には、こうした声が士族から頻々と入っていた。

大村が進める急進的な軍制改革、特に武士の魂ともいえる帯刀を禁じる廃刀令を主唱していることに多くの士族が反発を強めていたからだ。

——大村をこのままのさばらすと士族がどんどんないがしろに

されていくぞ。

危機感が士族の中に募り、それが不平不満となって渦巻いていた。

弾正台では「刺客たちを無慈悲に死刑に処すれば、全国津々浦々の不平士族たちが政府に対して不満を爆発させることになるだろう。暗殺行為は、許されない悪だ。しかし彼らの心情を思いやる時、その私心なき武士道は善であり、死刑に処するべきではない」という意見が大勢を占めたのである。

貞剛は、過激な攘夷派ではない。しかし、大村という政府高官を襲った刺客であっても正当な裁判を経て罰せられるべきだと考えていた。

「刑部省が死刑にしろと言ってきたとしても、我が弾正台は堂々と意見を奏上し、死刑を回避せしめるべきである」

貞剛たちは、今か今かと刑部省京都出張所からの決議報告を待っていた。

ところが――。

「神代たちは、早々に粟田口あわたぐちの刑場に送られた模様です」

弾正台で執務していた貞剛の下に緊急の情報もたらされた。

粟田口刑場は、東海道から京都に入る入り口で、現在の京都府山科区やま、蹴上駅けあげ近辺である。

刑部省が、弾正台の奏上を飛ばして死刑を断行しようとしている。これは絶対に許されない。

「馬をひけ！」

貞剛は、書類を伏せ、がばりと立ち上がると、すぐさま馬丁に命じた。

突然の貞剛の大声に弾正台は騒然となった。

馬に跨またがった貞剛は、同僚に「拙せつしや者は今すぐ栗田口刑場に行き、神代らの死刑を中止させて参ります」と告げ、馬に鞭むちを当てた。

貞剛を乗せた馬が風を切って疾走しつそうする。

死刑を執行させてはならない。師、吉輔は、新しい時代は法が支配すると言われたではないか。誰もが法の下で平等に裁きを受ける権利がある。見せしめの死刑、それは私わたくしによる私刑に過ぎない。このようなことを放置すれば弾正台など不要になる。有名無実になる。

馬に激しく鞭むちを入れる。

——間に合ってくれ。

「どけ！ どけ！」

前方を歩く人々に向かって声を張り上げる。

栗田口刑場に向かう三条街道に入った。人で溢れている。死刑見物に向かう見物客の群れた。

残酷ざんこくなようだが、この時代の死刑は公開処刑だ。物売りまで出て、まるで祭りか何かのようになる。

締め付けの厳しい世の中に生きる庶民にとって死刑は、カタルシス、うつぶん晴らしの格好の見世物なのである。

一方、統治する側は、一罰百戒いちばつひゃくかいの諭たとえの通り、政府に逆らったり、犯罪に手を染めたりすれば、極刑になることを見せ、犯罪の抑止効果を狙っていたのだ。

「今日の処刑は、あの大村様を斬りつけたお侍たちらしいぜ。それも同じ長州人だっていうから、驚きだな」

「大村様は戊辰戦争では活躍なされたが、随分と恨まれているんだなあ」

「上手く政府に食い込んだお侍とそうじゃないお侍とでは差が開いたからな。一方はお茶屋遊びに明け暮れるお大臣で、一方は明日をも困る身分だぜ」

「それで廃刀令で刀まで奪われたら、たまらないなあ。しかし、今まで威張りくさったお侍が処刑されるのは、ちよつとざまあみろつて気分だぜ」

馬上の貞剛に人々の囁ささやきが聞こえてくるようだ。

「どけ、どけ！」

貞剛は叫び続ける。

馬が地面を蹴る度に砂塵が舞う。

「なんだ、なんだ、危ないぞ」

見物客が蜘蛛の子を散らすように道を開ける。

刑場が見えた。

斜めに組んだ格子の竹矢来の周りに見物客が群がっている。

京都府の関係者や刑部省京都出張所の役人たちが、床机に腰を掛けて見えているのが見える。

彼らを取り囲んでいる真ん中に六人の男が、後ろ手に縛られ、筵の上に正座させられている。その傍では、処刑人が腰の刀の鍔に手をかけていた。

処刑寸前である。

「待て！ 待て！ その処刑、待たれい！」

貞剛は、役人たちが居並ぶ前に馬を乗り入れた。

「なに奴じゃ」

刑部省の役人が気色ばんで立ち上がった。床机が乱雑に倒れる。

貞剛は、馬からひらりと飛び降りた。

刑部省の役人の前にまかり出て、その場に膝をつく。

「私は、弾正台京都支部、巡察伊庭貞剛と申す者であります。この度の処刑、異議ありと、中止を求めに参りました」

刑部省の役人を睨みつけ、声を張り上げる。

「なんだと！」

刑部省の役人が腰の刀に手をかけた。

まさに貞剛を斬ろうとした、その時、続々と刑場に馬が入ってくる。弾正台の同僚が駆けつけたのである。

すぐさま彼らは貞剛を取り囲むようにして、それぞれが刀に手をかけた。

弾正台と刑部省の役人同士が睨み合う。刑場が、一触即発の緊張感で張り詰めていく。

死刑執行の寸前だった刺客たちも処刑人も事態に驚き、目を見張っている。

「おい、おい、どうなっているんだ。お侍同士の斬り合いが始まるのか」

「なにをやっているんだ！ 早く首切りを見せろ」
竹矢来の外で見物客が叫んでいる。騒ぎが大きくなり始めている。

貞剛は、刑部省の役人を見据えた。

「^{おそ}恐れながら申し上げます。この度の死刑は弾正台の吟味、奏上を経っていない違法のものであります。このような死刑を認めては国家の秩序が保たれません。なにとぞ^{ほうよ}猶予いただき、弾正台とご協議
いただきたい」

貞剛の声は、朗々として刑場全体に響き渡った。

「すでに決定したことだ。刑部省の本省からの許可も出ておる」

刑部省の役人が口角に泡を飛ばす。

「それは正式な許可でありましょうか。ならば決定の書類をお見せください。ご承知の通り規則では弾正台の奏上が必要となっております。しかし、私どもは何も奏上しておりません。従って東京の弾正台本台からは私どもになんらの指示も来ていないのであります。そうした手続き不備の決定で死刑にすることはまかりなりません」

貞剛は一步も引かない。片膝を立て、刑部省の役人に今にも飛びかからんばかりの姿勢を保っている。

貞剛の周囲を囲む弾正台の役人たちが一步、前に出る。手は、刀の鐔にそえたままだ。

「むむむ」刑部省の役人は苦り切った表情で、「貴様ら弾正台風情ふせいが出る幕ではないわ。処刑の権限は刑部省にあるのだ」と大声で喚わめく。

——弾正台風情。

弾正台に、いまや時代に取り残された感のある過激な攘夷派が集められていることを知ったうえでの罵ば言ごん雑言ざつごんである。

弾正台の役人たちは激高した。

「許せん。こやつらを切って捨てん」

まさに刀を抜こうとする。

貞剛は、仲間を押しとどめる。

「お言葉を返すようでございますが、弾正台は内外の非違を糾弾きゆうたんし、正すことが役目でございます。もし刑部省に非違がありますならば、私どもは今すぐに正さねばなりません。それでよろしいでしょうか」

貞剛は、片膝立ちのまま、刑部省の役人ににじり寄る。

刀の鏢にかけた手に力を込める。まさかこのような場所で四天流免許皆伝の腕を披露したくはない。

無言で睨み合いが続く。

「早く処刑しろ」

「ぐずぐずするな」

竹矢来を囲んだ見物客の声が大きくなる。

中には、竹矢来を倒しかねないほど揺らしている者もいる。

刑場を管理する京都府の役人が「竹矢来を揺らすではない。止めなさい」と怒鳴り散らす。

「俺たちは、首切りを見に来ているんだ。さっさと始めろ」

「そうだそうだ。いつまで睨み合っているんだ。陽が暮れてしまうぞ」

見物客は増える一方だ。なかなか始まらない処刑にいら立ちが募っている。

——このままでは見物客が暴れ出すかもしれない……。

貞剛は、これ以上騒ぎが拡大することを防がねばならないと思った。

「海江田様に状況を報告してください」

貞剛は、弾正台の仲間に言った。

「承知した」

仲間の一人が、馬にまたがり、弾正台京都支部へと急ぐ。

*

貞剛たちの報告を聞いた弾正台京都支部長官、海江田は、京都府知事で大参事の松田道之みちゆきと会い、栗田口刑場の処刑中止についての理解を求めた。

刑部省京都出張所は、実質的に松田の傘下さんかにあった。

「東京の弾正台本台から正式の裁可が下りませぬ。このままでは手続き違反となり、京都支部としては処刑に立ち会うことはできません。罪人が処刑場に送られる前に私どもとご協議いただければよかったです。でございますが」

海江田は、松田に皮肉を込めて強く申し入れた。

「我々は、刑部省本省から早く処刑をしろと言われております」

松田は、主張した。

なかなか海江田の申し出に取りあおうとしない。

時間が経過していく。

このままでは見物客が暴徒となりかねない。部下が松田の決断を促す。暴動が発生すれば、松田の落ち度になる。

「とりあえず今日のところは中止いたします。しかし、死刑は確定しております。後日、弾正台がなんと言おうと処刑は執行いたします」

松田は、厳しい表情で言った。

ひとまず処刑は回避されたのである。

*

栗田口の処刑場では、刑部省の役人たちが集まって協議をし始めるのが貞剛の目に入った。

貞剛と対峙する役人の表情に動揺の色が浮かび、落ち着きが無くなってきた。

「失礼する」

役人は貞剛に断りを入れ、その場を離れると協議に加わった。

「ひとまず処刑は中断だ。引き上げるぞ」

刑部省の役人が声を張り上げた。

貞剛は、静かに立ち上がった。袴の土埃つちぼこりを払い、「失礼いたしました」と刑部省の役人に一礼する。

「このままで済むと思うな！」

刑部省の役人は捨て台詞ぜりふを吐き、罪人たちを引き連れて立ち去った。

「なんだ、中止かよ」

「お侍の睨み合いを見ただけじゃないか。つまらん」

見物客からは不満の声が聞こえたが、たちまち潮が引くようになくなった。

既すでに辺りよじやみは宵闇に暗く沈み始めていた。

「刑部省の連中、ざまあみるだな。弾正台の力を思い知ったか」

弾正台の仲間が快哉かいさいを叫んだ。

しかし貞剛は喜ぶことができなかった。刑部省と弾正台の対立につながる大問題になる可能性があるかと懸念したのだ。

4

貞剛の懸念は的中した。

翌日、刺客たちの死刑は執行されてしまった。

弾正台との協議がないまま、上位官庁である太政官の裁定だった。刺客六名は果たして刑場の露と消えてしまった。

主犯格の神代は、逃亡先の長州藩に名乗り出て、その地で処刑されたという。

残り一人は、逃亡中に亡くなったと言われている。

こうして大村益次郎暗殺事件の処理は済んだのだが、残る問題は、弾正台京都支部が栗田口刑場での処刑を差し止めたことだった。

刑部省本省が死刑の裁可を下しているにもかかわらず弾正台京都支部がそれを一時的にせよ中止させたのは、政府に対する反抗である。

これが京都府、ならびに刑部省京都出張所の言い分だった。

今回の事態は栗田口止刑事件として後々まで語られる大事件となるが、貞剛は、主な原因は次の二点にあると考えた。

一つは、弾正台に軍隊の西洋化や国民皆兵など、大村の軍制改革に反対する攘夷派がいたことで、暗殺事件との背後関係に疑念が持たれたこと。もう一つは、刑部省と弾正台とにおいて犯罪捜査、訴追、裁判などの権限分掌が明確化されていなかったことだ。

これでは法の下での平等など、絵に描いた餅になるのではないか。しかし弾正台の下級役人の立場では、いかんともしがたい。

翌一八七〇年（明治三年）三月十四日、貞剛たち弾正台京都支部

の役人たちは、栗田口止刑事件について東京の弾正台本台から喚問のため呼び出しを受けたのである。

事態の推移を心配した貞剛は、吉輔に面会を求めた。

喚問され、免職になるかもしれない。否、いな最悪の場合は政府に反抗したとして逮捕される可能性もないではない。

「先生もご存知の通り、栗田口の処刑を差し止めた件で東京に呼び出しを受けました。もしやご迷惑をおかけすることになるかもしれません。大変、申し訳なく思っております」

貞剛は、緊張した表情で言った。

ところが吉輔は、いつもと変わらぬ温厚な態度だ。笑みを絶やさない。

「なんの、全く心配には及びません。むしろいよいよ君が中央へ乗り出す機会が到来したものと喜んでいきます。君のような有為な人材は、中央でも欲しております。自信をもって自分の意見を申し述べてください」

吉輔は言った。

貞剛の表情に明るさが戻った。

「東京に行かれたら、太政官中弁の江藤新平えとうしんぺい殿を訪ね、教えを乞いなさい。彼は佐賀藩出身の非常に有能な人物です。必ず政府の中心に座ります。司法関係に明るく、今回の問題は我が国の司法制度が

未熟であることから起きたことだと考えていることでしょう。彼が中心となって、法の支配が行き届くように良き方向に改革すると思えます。すでに手紙を出しておきましたから遠慮することはありません」

吉輔は、どこまでも落ち着き、穏やかだ。

「ありがとうございます」

貞剛は、平伏した。滅入^{めい}っていた気分は、すっかり高揚へと変わった。

「先生、お陰様で一日でも早く東京に行きたいという思いになりました」

貞剛は笑顔で言った。

「それでいいのです。東京に乗り込みなさい」

吉輔は貞剛を励ますように言い、親戚筋にあたる東京の近江屋^{おうみ}への紹介状と当座の費用に充当するための手形を切って、貞剛に渡した。

近江屋は、吉輔の門下生である八幡町^{はちまんちよう}の西川重威^{しげたけ}が営む、綿織物を扱う太物問屋^{ふとものどんや}だ。重威は寝具で有名な現在の西川産業の基礎を築いた人物である。

同年四月四日、貞剛は東京の伝馬町^{てんまぢよう}の宿に着く。

しばらくして弾正台本台で喚問を受けたが、すでに刑部省との間

で事件処理の合意ができていたのだろう、幸いにして貞剛への喚問は形式的なものに過ぎなかった。

しかし大忠である海江田は謹慎処分となり、一部、過激な尊王攘夷派である大巡察九人が免官となった。

同年六月七日、貞剛は東京の弾正台本台で勤務せよとの下命を受けた。

貞剛は近江屋を訪ね、二百金ほどを借用し、番町ばんちように家を借りた。番町は皇居の西に位置し、江戸時代は多くの御家人や大名の家臣たちの屋敷があつたが、明治になり、それらは政府の官僚の屋敷となった。

貞剛が求めたのも大名の家臣の屋敷であり、広くはあつたが、建屋は雨漏りがするほど古びており、庭は雑草が生い茂っていた。

一見すると化け物屋敷のようであつたが、貞剛は、その自然のままの姿が気に入って購入した。

貞剛は、江藤を訪ねることにした。東京に来て、すぐに江藤を訪ねなかったのは、江藤が同年一月二十一日に虎ノ門で六名の暴漢に襲われ、重傷を負ったからである。

犯人は、彼と同じ佐賀藩の、卒族そつぞくと言われる足軽あしがるの者だった。

彼らは江藤が行った佐賀藩の改革で、それまで支給されていた報酬が無くなつたり、足軽の職を失つたりしたため恨みに思い、凶行

に及んだのである。

藩主鍋島直正なべしまなおまさは、「我が藩から差し出した朝臣を襲った罪は重い」として六名全員に死罪を命じた。

江藤は、藩主が勝手に死罪を命じることに反対し、直正に彼らの救命を頼んだが、許されなかった。

この事件がきっかけになり、政府は足軽である卒族の不満を抑えるために士族に編入することを決定した。

江藤は、傷も癒え、中弁として太政官で勤務を再開していた。

江藤の使命は、政府の各部署の権限が曖昧あいまいで無責任や強引な権限侵犯がまかり通る無秩序といっても良い状態を整備、合理化することだった。

それに加えて江藤がぜひともやりたいと考えていたのは、法の支配の徹底ということだった。

無秩序な政府を整備、合理化するには法の支配を徹底することが必要なのだ。

江藤は、自分を襲った暴漢が藩主によって処刑されたことは許されることではないと考えていた。

確かに彼らの行為は許し難い。しかし誰であろうと、公平に裁判を受ける権利がある。人々の命を藩主が自由にできるままにしておけない。

江藤は、弾正台と刑部省が対立した栗田口止刑事件も、司法権が独立していないことが原因で起きたと考えていた。

貞剛は、麴町区、皇居桔梗門近くにある太政官府に江藤を訪ねた。太政官府の応接で貞剛に向かい合った江藤は、政府の高官でありながら気さくな人物で、居丈高いただけかではない。どんな知識でも吸収しようという気概に溢れていた。

江藤を一目見た時、この顔はどこかで見たことがあると貞剛は思った。

品川弥二郎しながわや じろうに似ている。そう言えば彼は、今頃どうしているのだろうか。

聞くところによると、戊辰戦争での功績を認められて欧州へ留学しているらしい。きっと新しい知識を吸収して帰国してくることだろう。

江藤との話は、栗田口止刑事件に及んだ。

「法の下に誰もが平等でなくてはなりません。大村殿を襲ったことは許されませんが、それを刑部省が勝手に死刑にしたのは返す返すも残念であります。正式な裁判を経たうえで、罪科を決めるべきだと思います」

貞剛は江藤に言った。

法の下の平等——。

これは貞剛の考えの根本を成している。徳川幕府時代は、武士が恣意的に人々を処刑していたが、それを根本から変えねばならない。

「伊庭殿、私もその考えに同意です。刑事裁判は、刑部省の管轄となっておりませんが、実際は各府、各藩で行われているのが実情です。それは民部省の管轄であり、司法府ではなく行政府なのです。ですから実際は、裁判が行政府で行われておるわけです。これでは行政府に都合の悪い者は勝手に処罰されてしまいます。徳川幕府の時代と一向に変わらないではありませんか。政府に都合の悪い者を排除できるのですからね」

江藤は、笑みを浮かべ、大きく膝を打った。

「弾正台は、刑部省の裁判に関与できることになってはいますが、権限が曖昧でありますし、あまり関係もよろしくありません」

貞剛は眉根を寄せた。

「そのようすな。弾正台には、刑部省なにするものぞという空気があるのでしょうか。刑部省は、弾正台と協議して裁判をしなくてはならないにもかかわらず、実際は行政府に隷属れいぞくしてしまっておりませす」

江藤の視線が強くなる。

「江藤殿はどのように改革されるおつもりなのですか」

貞剛が聞く。

「私は、刑部省と弾正台を統一し、強力な司法省を作るつもりです。その下に裁判所を置くのです。天下の法は司法省の所管であり、その法は裁判所が司ります。西欧では、司法権は行政権から独立しており、いかなる行政の勝手な振る舞いも法に照らして裁断されるのです」

江藤は、強い口調で言った。

「司法権の独立……。それこそが全ての人が法の下で平等になるということなのです」貞剛は震えが来るほど感激した。「私は、近江の代官の家に生まれましたが、武士が武士であるというだけで偉いということはないと思っております。それぞれの者が、それぞれの立場で能力を発揮できなければ新しい時代になった意味がありません。五箇条のご誓文にも『官武一途庶民に至るまで、各おのおのその志を遂げ、人心をして倦うまさしめんことを要す』とあります。そのためにも法の下では誰もが平等であることが必要です。江藤殿、よろしく国家機構の改革をお願いいたします」

貞剛は平伏した。

「あなたのような有為な、かつ西川吉輔先生に教えを乞われた方も、ぜひともご協力いただきたいと思えます」

江藤は、貞剛に頭を下げた。

年上であり、かつ高官であるにもかかわらず、偉ぶったところが

少しもない。

貞剛は、このような人物が政府の中枢にいる限り、志を抱いて職務を果たす意義があると確信した。

「本日は、江藤殿にお会いできて非常に有意義でありました」

辞去しようとする、江藤が歩み寄り、貞剛の手を取った。

「まだまだ道半ばです。改革を進め、この国を早く西欧に追いつく一流国にいたしましょう」

江藤の手の力が強い。そしてその目は輝いている。

貞剛は、江藤と別れて、太政官府の外に出た。

晴れ晴れとした気分だ。

貞剛は、法の下に皆が平等に、生き生きと暮らす社会を作る、その一助になるのが自分の使命だと強く心に誓った。

「司法省か……」

より強力な司法権を持った組織を、江藤なら早晚、作り上げるだろう。

ぜひともそこで働きたい。そこは自分が理想とする社会を作り上げるために必要な組織になるだろう。

——今日は、爽快な日だ。

江藤からは出世や金銭に対する欲が全く感じられなかった。純粋な子供のように理想に向かって進んでいる。俗世間的に言えば、非

常に不器用な生き方――。

その姿が、自分と重なって見えたのだ。それが貞剛を爽快な気分
にさせていた。

――どうも自分の周りには、吉輔といい、弥二郎といい、俗世の
欲には見向きもしない人が集まって来るようだな。

貞剛は、人との出会いに、不思議な縁を感じた。

自分自身が俗世の欲に囚とらわれていたら、そういう類たぐいの人が集まっ
てくるのだろう。反対に欲から離れていれば、純粹に国家建設の理
想に燃える人が集まってくる。

自分は、俗世の欲と離れた生き方をするのが相応しく、心地よき
そうだ。

貞剛は太政官府を振り返った。

「江藤殿、改革を心待ちにしておりますぞ」

5

一八七一年（明治四年）二月二十七日、参議ひろさわひようすけ広沢兵助（真臣まねおみ）
が就寝中に襲われ、殺された。

横井、大村に続く大物の暗殺事件である。

貞剛は、この事件の捜査に当たった。

当初は、同衾どうきんしていた愛人と、彼女と密通していた広沢家の使用人の関与が疑われたが、結果は無罪となった。

無辜むこの庶民が死刑にならなかったのは、貞剛たち弾正台の捜査が適切だったと言えるだろう。

事件の捜査は難航した。

——長州藩内部の派閥争いが原因だ。木戸孝允きとたかよしが犯人である。

——広沢と対立していた薩摩藩の大久保利通の陰謀だ。

情報が入り乱れ、貞剛たちは、その都度ほんろう翻弄された。

一方、政府は攘夷派の犯行を強く疑っていた。

横井小楠、大村益次郎が攘夷派に暗殺されたからである。

広沢は、大久保や木戸たちと共に西洋化を進めたために殺されたとの噂が流れ、政府高官たちは明日は我が身と恐怖おのに慄いた。

そのため、この際、攘夷派を一掃するべきとの政府の意向が弾正台に届いていた。

ある時、急に攘夷派の長州藩士、大楽源太郎だいらくげんたろうが広沢暗殺の容疑者として浮上した。大村益次郎暗殺の際にも関与者として名前が挙げられたことがあるからだ。

逮捕を察した大楽は逃亡し、久留米藩くろめにかくまわれていた。

当時、九州の諸藩には政府の西洋化方針に反対する攘夷派が多かった。大楽は彼らを頼って久留米藩に逃亡したのである。

同年三月、貞剛たちは大楽を逮捕するために久留米藩へと向かった。

しかし久留米藩は容易に大楽を弾正台に引き渡さなかった。そこで弾正台は、久留米藩に軍を派遣してでも逮捕するという強硬策に傾こうとしていた。

この事態を受け、久留米藩は大楽を自分たちの手で斬首し、私闘の末、死亡したことにしてしまったのである。

容疑者を取り逃がし、とうとう広沢暗殺事件は迷宮入りとなってしまった。

ところが貞剛は、そのまま九州に留まることになった。弾正台長崎支部に勤務を命じられたのである。貞剛の任務は、九州の攘夷派の動静を探ることだった。

同年八月二十九日に政府は、廃藩置県を挙行了した。

版籍奉還をしたものの旧藩主の影響力が大きく、一向に統一国家の体制づくりが進まない。

政府は焦った。そこで薩長土肥の兵を集め、自前の軍隊を組織したうえで、一挙に藩を無くし、全国を府と県に再組織する廃藩置県を挙行することにしたのである。

旧藩主はその地位を追われ、東京に居住することになった。各府県には政府が任命する県令が派遣された。

廢藩置県により政府は、一挙に中央集権体制の確立を意図したのである。

当然、これに反対する攘夷派が反乱を起こすかもしれない。

政府は、貞剛に事前に反乱分子を探索し、その動きを抑え込むように命じたのである。

しかし反乱は起きなかった。

廢藩置県を受けて、同年九月十三日太政官制が改正された。

天皇が臨席する正院、行政権の右院、立法権の左院の太政官三院制となった。

三院の下に神祇省、大蔵省、兵部省、宮内省、外務省、司法省、工部省、文部省、内務省、農商務省の各省が設置され、貞剛の属していた弾正台は刑部省と統一され、司法省となった。

——江藤殿の言われた通りになったぞ。

同年九月十七日、貞剛は司法少解部とせきぶとなり、九州、長崎を引き上げ、東京に戻った。

同年十二月十日には司法大解部、翌一八七二年（明治五年）九月九日には司法省検事となった。

出世に拘泥こうでいすることは全くなかった貞剛だったが、司法省の中で順調に昇進を遂げに行ったのである。

そしてまつ子という伴侶はんりよを得、長女はる子が生まれた。

一八七三年（明治六年）十月五日、貞剛は北海道函館裁判所の勤務を命じられた。

貞剛は、妻まつ子と娘はる子を伴い、新天地函館へと赴任したのである。

貞剛、二十六歳の新たな出発だった。

〈つづく〉